

フタオビコヤガ（イネアオムシ）

○ 被害と発生生態

フタオビコヤガは別名イネアオムシと呼ばれ、幼虫がイネの葉を食害し被害を与える。成虫は体長約6～10 mm、全体が深黄色のガで、翅の表面に2本の平行の暗紫色の帯状の模様があるのが特徴である。山口県内における成虫の発生時期は4月下旬～9月頃で、発生回数は年4～5回程度である。越冬は蛹でわらの中等で行われる。

幼虫の発生は6月頃から目立つ。幼虫による被害はイネの生育初期にみられることがあるが、イネ出穂前の7月中旬～8月中旬の被害が大きい。若齢幼虫は葉脈と表皮を残して白いカスリ状の食害痕を残すように食害し、3齢以降の幼虫は葉縁から食害するようになる。さらに、4～5齢の幼虫は摂食量が急激に増加するため被害もあわせて大きくなる。

また、幼虫は山間山沿地域で見られることが多く、多肥で葉色が濃く、過繁茂で通風が不良なほ場で局地的に多発する場合がある。さらに、幼虫期に曇雨天の天候が続き湿度が高い年に発生が多い傾向がある。

山口県では、フタオビコヤガの幼虫と同様にイネの葉を食害し被害を与える害虫としてシロマダラコヤガがあり、多発した事例がある。シロマダラコヤガ幼虫の体色は、フタオビコヤガ幼虫の体色が淡緑色であるのに比べ黄緑色～黄褐色である。

○ 防除方法

(ア) 耕種的・物理的防除

- ・多肥栽培を避ける。

(イ) 薬剤防除

- ・多発時には防除を行う。



フタオビコヤガ幼虫



シロマダラコヤガ幼虫



被害葉